

幼保小接続・連携を充実させるためのカリキュラム・マネジメント

田中 裕子¹

要旨

本稿は、Y市における幼保小接続・連携の実践を検討することで、今後の幼保小接続・連携を充実させるためのカリキュラム・マネジメントのあり方を考察することが目的である。当時先進的な取り組みとされたY市が2011年に打ち出した「接続期カリキュラム」は幼児期終了前を「アプローチカリキュラム」、小学校入学から1学年1学期終了を「スタートカリキュラム」の時期として位置づけ、幼保小交流がなされてきた。研究の方法として第一に、Y市が作成・実施した「接続期カリキュラム」について、分析・考察する。第二に、中学校区で進められた教育活動の実践と合同研修を振り返り、効果、および改善点や課題を抽出し、カリキュラム・マネジメントのあり方の問題点を探った。その結果、幼保小交流では小学校に進学した時の姿を見通して実践するが、実践結果をカリキュラムにどう反映していくのかについて、双方での共通理解に課題があることが明らかになった。

キーワード 幼保小接続・連携 カリキュラム・マネジメント アプローチカリキュラム
スタートカリキュラム 接続期カリキュラム

1. 問題の所在と目的

1.1. 接続・連携が重視される教育的背景

幼稚園教育要領〔文部科学省，2017〕、幼保連携型認定こども園教育・保育要領〔内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017〕及び保育所保育指針〔厚生労働省，2017〕と小学校学習指導要領〔文部科学省，2017〕の中に、幼稚園教育等と小学校教育との円滑な接続を図ることが求められている。小学校学習指導要領〔文部科学省，2017〕においては、「特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」〔文部科学省，2017：p21〕とされている。また、小学校学習指導要領〔文部科学省，2017〕と幼稚園教育要領〔文部科学省，2017〕、幼保連携型認定こども園教育・保育要領〔内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017〕、保育所保育指針〔厚生労働省，2017〕の中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が共通に示された。さらに、小学校学習指導要領〔文部科学省，2017〕には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を發揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」〔文部科学省，2017：p21〕と記されている。

ここで述べている幼保小の「接続」とは幼児教育と小学校教育を円滑につなぐという

¹ 短期大学部こども学専攻

意味で用いられ、「連携」とは幼稚園、保育園と小学校双方のカリキュラムをつなぐことが最終的な目標である。〔文部科学省，2017：pp40 - 42〕秋田は、「『交流』や『連携』が保育・教育制度間での人とのかかわりを指しているのに対して『接続』は教育内容および教育制度の設計や変更といったシステムの在り方を指す」〔秋田，2010：pp6－11〕と述べている。

1.2. カリキュラム・マネジメントについて

2017年3月の幼稚園教育要領・小学校の学習指導要領が改訂され、2018年度より幼稚園、2020年度から小学校新学習指導要領が実施される。これらの改訂により、これからの幼保小の連携・接続について強調されているポイントとして学校種間の連携・接続の強化とカリキュラム・マネジメントをあげることができる。カリキュラム・マネジメントとは、田村は、「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営みである。」〔田村，2011：p2〕と述べている。また、2016年12月に出版された学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会答申で、カリキュラム・マネジメントは次のように説明されている。「各学校には、学習指導要領等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、学習指導要領に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくことが求められる。これがいわゆる『カリキュラム・マネジメント』である」〔中央教育審議会，2016 p 23〕

接続期カリキュラムについて、木下は、「幼児期の5歳児後半に小学校を意識した保育を営むことが『アプローチカリキュラム』で、小学校の就学期に幼児教育を踏まえた学校教育を行うことが『スタートカリキュラム』である」〔木下，2019：p92〕と述べている。

ではなぜカリキュラム・マネジメントという考え方が求められるのか。小学校新学習指導要領解説には、次のように書かれている。教育活動を主体的に改善していく必要性、重要性はいうまでもないが、地域や学校の実態に即し、学校の特色を生かす工夫をし、各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。

これらの取組の実現のためには、学校全体として、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることが求められる。〔総則編小学校新学習指導要領解説，2017：p39〕

1.3. Y市の取り組み

2011年10月～2014年10月において、Y市では中学校区で就学前から小学校への円滑な接続を目指して幼保小交流を行ってきた。学びの一体化幼保小連携部会^(注2)で、2011年に小1プロブレムの解消に向けた接続期カリキュラムを作成し、中学校区で取組を進めてきた。接続期の保育・教育活動として、友だちとの関係づくり、一日の生活時程、保育

室・教育環境、学びの基礎となる力、規範意識の5項目について示された。

そこで本研究では、幼保小接続・連携の実践を検討することで、幼保小接続・連携を充実するためのカリキュラム・マネジメントを改善していった過程について述べる。

2. 研究の方法

第一に、Y市が作成・実施した「接続期カリキュラム」に対して、取り上げ、検討し、問題点を探る。

第二に、中学校区で進められた教育活動の実践と合同研修を振り返り、効果、および改善点や課題を抽出し、カリキュラム・マネジメントに反映させ、改善していった過程を振り返る。

3. Y市の接続期カリキュラム^(注1)

Y市では、接続期の保育・教育活動として、「友達との関係づくり」、「一日の生活時程」、「保育室・教育環境」、「学びの基礎となる力」、「規範意識」の5項目について示している。

本研究では、紙幅の関係で、幼保園と小学校の生活の中で、子どもたちにとって比較的变化の少ない「友達との関係づくり」と生活の流れが大きく変わる「一日の生活時程」の2つを対象として検討し、問題点を探る。

表1、表2に示したY市が2011年に策定した「幼小接続期カリキュラム」は、就学までに身につけたい力をあげ、接続期を5歳10月から小学校1年の1学期終了7月までとし、10月～3月をアプローチカリキュラム、小学校入学から1学年1学期終了4月～7月をスタートカリキュラムの時期として位置づけるという先進的で注目すべき取り組みであった。当時小1プログラムが取り上げられ、「どうしたら小学校に行ってもスムーズに学校教育に馴染めるか」というようなことをねらいとして幼児期のカリキュラムを見直すことが多かった。

ここでは、筆者も参加したY市の「接続期カリキュラム」を例に取り上げて、初期の2011年から4年間の幼保小連携・接続プログラムである「接続期カリキュラム」を検討する。

3.1. 友達との関係づくり

資料1 接続期の保育・教育活動（友達との関係づくり）における接続期カリキュラム

	保育園・幼稚園					小学校					
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	
友達との関係づくり	日常の当番活動や係り活動をする						自分の当番活動や係活動を、責任を持って行う				
	発表会や行事に向けて、劇遊び・合唱などの練習をする						各教科ではペアやグループで話し合ったり発表したりする				
	学級全体で楽しさを感じられるような遊びを経験する						学級での集団遊びを楽しむ				
	自分の思いを相手に伝えられるようにする						自己紹介をする				

保育園・幼稚園では、行事などで、年長児が中心になって活動する。簡単な当番活動を通して、自己有用感・責任意識を育む。小学校低学年では、当番活動・日直の仕事から始まり、係活動や学級活動へと少しずつ範囲を広げ、友達と協力しながらやり遂げる機会を増やす。友達との関係づくりは、保育園・幼稚園では、年下の子に対する接し方を学ぶ機会を重ねたり、日頃の生活や遊びの中で、友達関係を広げる。小学校では、隣同士の関係作りからスタートし、学びや遊びの様々な場面で人間関係を広げ、深めていく。

<考察1>

幼稚園・保育園の保育活動「日常の当番活動や係活動をする」→小学校の教育活動「自分の当番活動や係活動を責任をもって行う」は当番活動をするという経験が小学校でも生かされるので、スムーズにつながっていくと思われる。「発表会や行事に向けて、劇遊び・合唱などの練習をする」→「各教科ではペアやグループで話し合ったり発表したりする」は、友達と目標に向かって進めていくという「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」で捉えると「協同性」に当てはまる。しかし、発表会の取り組みが小学校でグループ発表をすることとどのようにつながるのか、分かりにくい。また、「自分の思いを相手に伝えられる」→「自己紹介をする」は、「言葉による伝え合い」になるが、どういう過程を経てつながっていくのかがここでもイメージしにくい。幼稚園・保育園は、2月から3月頃は、就学に向けて小学校へ行くことを楽しみにできるように話をし、新しい環境の中で簡単な自己紹介できるようにしておく。小学校への期待が膨らむ一方、不安を持っている子もいる。このようなことを、保育園・幼稚園の保育者と小学校の教師が分かり合っていることが必要である。

3.2. 1日の生活時程

資料2 接続期の保育・教育活動（一日の生活時程）における接続期カリキュラム

	保育園・幼稚園					小学校				
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
一日の生活時程	午睡なしの生活リズムを確立する					余裕を持って登校する				
	徐々に登園時刻を早める									
	1日の生活の流れを提示する					時程にあわせて行動する				
	片付けの時間などを意識して活動する					学習と休み時間を切り替え、チャイムを意識して行動する				
	クラス全体で活動する時間と、個々が主体的に活動する時間など、切り替えを意識する									

保育園幼稚園では、生活の区切りがないので、集団の生活では先生が「〇〇をしよう」と誘いかける。小学校低学年では、授業時間は、全員の集団学習・行動が原則である。

<考察2>

「一日の生活時程」では、保育園・幼稚園と小学校は大きく異なっており、お互いのことを知るチャンスとなる。まず、生活の始まりが保育園（早朝保育は除く）・幼稚園は9時からで、小学校は8時半からである。1月から「徐々に登園時刻を早める」と書いてあり、保育園・幼稚園はあらかじめ「1日の生活の流れを提示する」→小学校は時間割があり、「時程に合わせて行動する」となっている。幼稚園・保育園では、簡単なスケジュールをホワイトボードに示したり、時計の文字盤を使って話すなど、徐々に1日の生活を見通しをもって行動できるようにつなげている。時刻を意識して活動できるよう、早めの集合や準備、片づけを心がける。しかし、小学校に合わせて保育園・幼稚園の生活の時間を大幅に変えるということではない。

4. 中学校区で進められた教育活動の実践と検証

ここでは、中学校区で進められた教育活動の実践と合同研修を振り返り、効果、および改善点や課題を抽出し、カリキュラム・マネジメントに反映させ、改善していった過程を振り返る。本研究では、紙幅の関係で、3事例を対象として述べていく。

4.1. 事例1 Y市立A幼稚園(4・5歳児)・A小学校(1年生)

幼小連携活動指導計画案(芋ほり)			
2011年10月30日(木)			
<p><ねらい></p> <p>幼稚園・・・1年生と一緒に芋ほりを楽しみ、収穫を喜ぶ</p> <p>小学校・・・サツマイモの色や形、土の中の様子を観察する</p> <p><芋ほりを迎えるまでに></p> <p>幼稚園・・・1年生と一緒にする芋ほりの活動に期待が持てるように、遊びの中で絵本や歌、手遊び、身体表現を楽しむ</p> <p>小学校・・・園児と一緒にする芋ほりの活動に期待が持てるように、これまでの活動を振り返ったり、本の読み聞かせをしたりする</p> <p><当日の流れ></p>			
時間	活動	幼児への指導上の留意点	1年生への指導上の留意点
9:30	○園庭に集合する ・挨拶をする ・先生の話聞く これからの活動について 行き帰りの安全について	・幼小の子ども達で元気に挨拶を交わし、今から芋ほりに行くことに期待がもてるようにする。 ・芋ほりしながら土の感触を確かめ、いものつる、葉や形や大きさ、自分達で気づいたことや感じたことを表現していることに共感する。	
9:40	○畑へ移動する ・横断歩道では左右の確認をする ・児童と園児で手をつなぎ、畑までの道中を楽しく歩く	・左右の確認や歩き方など、自分達で安全に気をつけて歩く気持ちが持てるように言葉をかける。	・幼稚園児と一緒に歩いていくことで、年下の子に優しく声かけしたり、歩く場所を自ら変わったりしている姿を認めていく
	○畑に到着する ・幼小でグループを組み、協力して土を掘り起こし、芋を収穫する ・自分で掘った芋を袋に入れる	・同じグループの1年生の活動を手伝ったり、自分で意欲的に掘ったりできるように声をかける。 ・芋ほりしながら土の感触を確かめ、いものつる、葉や形や大きさ、自分達で気づいたことや感じたことを表現していることに共感する。 ・自分が持てる重さの範囲内で芋を袋に入れる。実際に袋を持って重さを確かめる。	・つるを引っ張ってみることで、土の中で、根を張って芋が成長していることを実感できるようにする。園庭に集合する
10:45	○畑を出発する ・芋を落とさないように気をつけてあるく。 手をつないでいる二人で安全確認をして帰ってくる。	・たくさん芋を袋にいれていたり、袋が破れたりしているときは、友だちと分け合って持ったり、袋を直したりする。 ・行きに手をつないできた幼小の子ども達で、安全に気を付けて歩くことができるように、言葉かけをしたり様子を見守ったりする。	
11:00	○園庭に到着する ・先生の話聞く ・収穫した芋を、手をつないできた2人で大きさ別に分ける。 ・一人が持ち帰る芋の数を聞いて、持ち帰る準備をする。 ・幼小でどのようにクッキングするのか、交流する。	・収穫した芋を大きさ別に分けることで、大きさを意識できるようにする。幼小の子ども達で相談したり、一緒に考えたりしている様子を認めていく。 ・幼小の子ども達で、一緒に数えながら袋に入れる様子を見守りながら。 ・一人ひとり、芋を持ち帰ることを一緒に喜び、どのようにクッキングするのかイメージを広げていることに共感する。	・幼児に話しかけながら「この芋は大かな?小かな?中かな?」と大きさを考える時間をゆっくり楽しめるようにする。
11:30	○終わりの挨拶をする	・今日の活動を思い起こせるように声かけをし、1年生を見送れる様子を言う。	・活動を振り返りながら、収穫した喜びを感じ、一緒に手をつないできた個たちで挨拶を交わすことができるように見守る。

<合同研修での振り返り>

【幼稚園】

- ・芋ほりを楽しむ雰囲気が、どの子にもあった。大・中・小に大きさを分ける活動で、ゆっくりとながめて考える姿があった。
- ・サツマイモのつるさしの活動の時期と比べて、今日の交流の様子は緊張がほぐれ、会話も多かった。

【小学校】

- ・国語「おおきなかぶ」の学習と連動鶴を引っ張る体験をしてさせようと考えていた。
- ・校内の遠足においては、高学年にお世話をしてもらっている。そのときの経験を生かして、自分達が道路側を歩いていたのが良かった。
- ・感想カードに「ペアの子がいっぱい笑ってくれたのでよかった」と書かれていた。活動に対しての満足感があった。

<考察1>

この交流は、年間計画に位置づけていることと、4歳児・5歳児・1年生の時期にサツマイモのつるさしから収穫まで半年間一緒に活動していることが大きな成果をもたらしている。つまり、この活動をどの子も3回（3年間）体験する。その体験から小学校への憧れの気持ちや小さい子への配慮の気持ちが自然に育まれた。

また、幼小で共に指導することを通して、小学校教員は幼稚園教員の幼児に話しかける姿勢や話し方に学び、1年生への指導における発問や投げかけに生かすことができている。幼稚園教員は、1年生の算数の学習内容を知ること、芋の数を数える活動に生かすことができた。幼保小の指導の違いやより良い声かけを学び合い、互いにその後の指導に役立った。

小学校は、サツマイモのつるさしから収穫の過程は生活科、感想カードを書くことは国語、数を数えるのは算数の教科内容が含まれる。幼稚園児にとっても芋の数を数えたり、1年生や友達と協力して収穫を楽しむ姿はこの時期のカリキュラムに位置付けられたねらいと合致している。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で捉えるといろいろな会話をして「言葉による伝え合い」、芋の大きさや個数に興味関心を持つことで「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、一緒に芋ほりの活動することで「協同性」の育ちが見られた。

指導計画案が幼稚園・小学校を通して一体化しているので、お互いの指導上の留意点がわかりやすく表記されている。幼・小の留意点が並んでいること、元々お互いのカリキュラムにあった「芋ほりの活動」だったこと、また、共通の留意点も多かったこともあり、声かけや関わりがしやすかった。活動の意味を互いに明確にし合って交流し、子どもの成長のために交流を行うことが目的であり、達成することができた。

課題としては、まず、この取り組みは3年目を迎えていたが、①翌年度からは全市的に年間計画の中に「幼保小交流」を位置づけることが確認された。さらに②「指導者の立場においても交流する意味を明確にしていく必要があること」があげられた。加えて③「芋ほり」という活動は幼小共通で見えやすいが、この活動から「子ども達が何を学んだのか」「どのように変容したのか」子ども達の様子をしっかりと把握し、明確にしていく必要がある。

4.2. 事例2 Y市立B幼稚園・B保育園(5歳児)・B小学校(2年生)

幼保小連携活動指導計画案(あきまつり)

2012年10月29日(月)

<ねらい>

幼稚園・保育園・・・2年生との交流を楽しみ、小学校生活への期待感や大きくなることへの憧れを持つ。

小学校・・・園児に、準備したコーナーのやり方やルールを説明したり、やさしく声をかけたりして、園児に進んで関わるができるとともに、友だちと協力して活動を楽しむことができる。

<当日の流れ>

時間	活動	幼児への指導上の留意点	2年生への指導上の留意点
9:35	<p>○小学校体育館に集合する 「始めの会」をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をする 2年生代表より 幼稚園先生より ・歌をうたう 2年生より 「校」歌 「勇気100パーセント」 園児より 「せかいじゅうのこどもたちが」 ・小グループに分かれて、自己紹介をする。 2年生 「名前と好きな教科」を言う。 園児 「名前と好きな遊び」を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2年生の話聞き、元気に挨拶することで、今から始まる交流に期待が持てるようにする。 ・小学校で学習する歌を知り、学校生活に対する期待が高まるようにする。 ・緊張や不安が感じられる中、自分たちが知っている活動をいれることで、緊張感がほぐれるようにする。 ・お互いの顔や名前を知り、より親しみを感じられるようにする。また、はっきりと大きな声で話そうとする態度を認める。 ・2年生の好きな教科を聞き、小学校での学習を楽しみに感じられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教室で、交流活動の目当てを確認しておく。 ・児童が進行など、自分たちで行えるよう支援する。 ・元気よく歌えるように声をかける ・2年生から紹介をさせる。 ・園児を意識して話をしているか見守り、個々の支援をする。
10:00	<p>○2年生の各教室(5学級)へ移動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生と手をつないで廊下を歩き、教室へ行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の廊下の歩き方を知り、静かに移動できるように配慮する。 ・初めての学校での活動に期待とともに不安を感じている園児もいるので、傍に寄り添って安心できるようにする。 ・トイレに行きたい時は、近くの2年生や先生に知らせるように伝えておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園児に声をかけながら、案内できるように支援する。
10:10	<p>○各学級で活動を始める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生の話聞く (コーナーの紹介) ・クイズ、ゲーム、歌、読み聞かせ、工作などのコーナーで遊ぶ。 <p>○終わりの挨拶をする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2年生が主体的に進めていく姿を見て、大きくなることへの期待を感じられる様「すごいね、かっこいいね」などと、教師も共感しながら声をかける。 ・ゲームに参加する中で、「どうやってするんですか?」「どうやって創るんですか?」「教えてください」などと、園児から声をかけられるように促す。 ・ルールを教えてもらったり、一緒にゲームを進めたりして楽しむ姿を認める。また、じっくり話を聞く・待つ・大きな声で返事をするなどの態度を認める。 ・2年生が今日まで準備を進め 	<ul style="list-style-type: none"> ・場所を示しながら、大きな声で言えるように声をかける。 ・コーナーの仕事の様子を見守り、個々の支援をする。 ・園児の様子を見て声かけができていないか(活動への参加、トイレ)見守り、個々を支援する。 ・良いかわりができていない姿をほめ、自信を持たせるようにする。

		<p>てきたことを知り、感謝の気持ちを持てるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今度出会うことを楽しみに思える様声をかけ、お礼を伝える。 	
11:00	<p>○体育館入り口に戻り、帰園する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生に送ってもらう ・活動を振り返る 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の交流を振り返り、学校の様子を思い出しながら、小学生になることへの期待を感じられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力して片付けられるように声をかける ・良かった点・改善点を出させる

<合同研修での振り返り>

【幼稚園】

- ・小学生の歌は、園児も知っている曲でなじみがあり楽しめた。また、校歌は小学校への憧れを持って聴くことができた。
- ・園児を思いやって言葉かけをしたり教えたりする小学生の姿が見られた。園児はどの活動も安心して取り組めた。
- ・交流を通して子ども達のつながりが見られ、分かれる時声をかけている姿が見られた。
- ・大勢での移動は難しいが、クラスによって遊びが違ったので他のクラスも回れると良かった。

【保育園】

- ・最初は緊張していた園児たちも、小学校の体育館や教室に入ってから活動の途中で次第に学校を楽しむ雰囲気が、どの子にもあった。
- ・体育館での自己紹介は、大勢で聞き取りにくかったが、頭を寄せ合って集まり、聞こうとする姿が見られた。
- ・園児たちは、自分たちが大勢の前で歌うことに緊張していたが、小学生が聞こうとしてくれる姿勢がよく、ほっとしていた。
- ・小学生の役割分担ができていて、園児たちも参加するのに戸惑わなかった。

【小学生】

- ・体育館での全体会では、自分達で進めることができていた。様子がわかり、学校への期待が高まった。
- ・2年生の子ども達は園児への言葉かけが丁寧で、1年生と比較すると、表現力が豊かである。
- ・教室では、園児に声をかけるより、自分達が楽しんでしまっていた。
- ・各教室での時間が長かったので、もう少し時間が短くても良かった。

<考察2>

交流の組み合わせとしては1年生と5歳児が多いが、2年生との交流を通して小学校生活で培った説明する力やかかわる力を十分に生かすことができた。2年生の話を聞く姿勢や園児を助ける姿などから、園児は聞く態度や親切な態度を学ぶことができた。

自己紹介は、3.1 友達との関係づくりの自己紹介のところでも述べたが、小学校で自己紹介できるようになるまでに、幼稚園・保育園でどのような経験や学びを積み重ねて小学校に入学していくのが重要なポイントである。単に自分の名前を言う練習をすることではなく、人前で自信をもって話すことができる気持ちを連続して育てることである。幼稚園・保育園の保育者と小学校の教師がそこを共通理解できると、なめらかにつながっていく。

事後研修で、「2年生にとっては周りの人を気にかける『人とのかかわりの成長』が見られた」という意見が出た。今回の経験が、今後いろいろな人とのかかわりの活動に生かしていけることが分かった。人とのかかわりは、教えても育つものではなく、活動の中で「幼稚園児に喜んでもらおう」とか、自分だけではなく、幼稚園児の気持ちをおしはかりながら、自然にかかわることができた。ここでは分かりにくい「意欲」が育っている。この意欲をさらに次のステップへ発展させるには、事例1でもあげられた課題、カリキュラムに「この活動からどのような力が育ったか」という活動内容だけでなく、子どもの変

容を幼保小で確かめ合う機会を持っていくことが求められた。

したがって、さらなる改善策としては、合同授業では、お互いの「ねらい」と「計画性」をもって取り組むこと。相互にメリットが感じられるように意識し、今後は子どもの育ちに生かしていけるよう取り組みの時期を計画していくことが望ましい。

4.3. 事例3 Y市立D幼稚園(5歳児)・D小学校(5年生)

幼保小連携活動指導計画案(幼稚園児となかよし交流会)			
2014年10月30日(木)			
<p><ねらい></p> <p>幼稚園・・・5年生との交流を楽しみ、小学校生活への期待感や大きくなることへの憧れを持つとともに、5年生とかかわりを持つとする。</p> <p>小学校・・・園児にどのような遊び方をしたり、どのような活動をしたりすれば、楽しく関わることができるか工夫して行動することができる。園児に喜んでもらうという自信から、日ごろの生活や人とかかわりの中で、相手の立場を考えて行動しようとすることができる。来年度に向けて園児とのかかわりを持つ。</p> <p><当日の流れ></p>			
時間	活動	幼児への指導上の留意点	1年生への指導上の留意点
10:35	○小学校体育館に集合する 「始めの会」をする ・挨拶をする 5年生代表より 幼稚園先生より	・5年生の話聞き、園児も元気に挨拶することで、気持ちをほぐし、交流に期待が持てるようにする。 ・教師は園児が今日の交流を楽しみにしていたことや、初めての場で緊張していることも伝え、園児の思いを代弁するように話す。	・各教室で、交流活動の目当てを確認しておく。 ・園児の緊張を和らげるよう、やさしく接するよう伝える。
10:38	○自然教室の紹介をする。 ・電子黒板を使い、活動写真を見せながら活動内容を紹介する。	・自然教室の活動写真を見て、5年生に憧れの気持ちが持てるようにする。	・園児に分かる言葉を使い、説明する。
10:45	○自然教室で行ったキャンプファイヤーのレクリエーションをする。	・園児は2人組で行動する。 ・優しく手をつないでもらったり、声をかけてもらったりすることで、安心して遊びに入っていくようにする。 ・中には、初めての学校の活動に、期待とともに不安を感じている幼児もいると思われるので、傍に寄り添って安心できるようにする。	・円になり、園児をその間に案内する。
10:47	・バクダンゲームをする 円になって座り、ボールを順に回していき、曲が止った時にボールを持っていた人が「自分の名前」と「好きな食べ物」を言う。	・自分の番が回ってきた時、「名前」や「好きな食べ物」をはっきりと大きな声で話そうとする姿を十分に認めていく。	・ルールの説明をする。園児に分かるよう、ゆっくりと話をしよう声をかける。
10:56	・猛獣狩りゲームをする 言われた動物と同じ文字数と同じ数ですばやく手をつないで座る。	・5年生のリードで手をつなぎ、円になると思われるが、園児も数を数えながら、人数が集まることを楽しめるようにする。 ・遊びの中で、分からないことや困ったことがあれば「どうしたらいいですか?」「教えてください」などと、園児から声をかけられるよう、促していく。	・ルールの説明をする。園児に分かるよう、ゆっくりと話をしよう声をかける。 ・園児の安全を考えて、走って移動することのないよう気をつける。
11:05	・じゃんけん列車をする 電車になって好きな場所を歩く。音楽が止った所で出会った人とじゃんけんをする。勝った人が先頭に、負けた人が後ろにつながって歩く	・ルールを教えられるよう、一緒に身体を触れ合わせたりして楽しむ姿を認めていく。	・ルールの説明をする。園児に分かるよう、ゆっくりと話をしよう声をかける。 ・身長差など、園児を気遣いながら活動するよう声をかける。
11:14	○終わりの挨拶をする ・近くのお兄さん、お姉さんにおんぶしてもらう	・5年生の話聞いたり、待ったり、大きな声で話す等の姿を認めていく。 ・5年生に遊び方を教えてもらい、楽しく遊べたことに感謝の気持ちを	

		持って、お礼が言えるようにする。 ・更に楽しみが感じられるように、おんぶのふれあいを楽しむようにする。	
11:15	○園児は幼稚園に、5年生は教室に戻る		

< 合同研修での振り返り >

【幼稚園】

- ・「バクダンゲーム」では、園児たちも馴染んでいる曲に合わせて楽しく活動できた。園児を思いやって言葉かけをしたり教えたりする小学生の姿が見られた。園児はどの活動も安心して取り組めた。
- ・曲が止まると、バクダンを持っている子にインタビューをしていたが、内容は「名前と好きな食べ物」という簡単な内容であり、園児にとっても答えやすい質問だった。
- ・「猛獣狩りゲーム」は、言われた動物の文字数と同じ数だけ人が集まるといった内容のゲームだったが、交流事後に園に戻ってからも、自分達で同じ遊びを楽しむ姿が見られ、言葉遊びが広がった。
- ・「ジャンケン列車」では、5年生の子達が、前で実際にやり方を見せてくれたので、園児にも分かりやすかった。
- ・最後に5年生におんぶしてもらったが、「うれしかった」という声が多くあがっていた。
- ・園児に不安を感じさせないために、最初、園児同士ペアにしてグループに入れたが、「猛獣狩りゲーム」になっても園児同士で固まる傾向が見られた。何らかのルールを作って異年齢の子が交じり合う仕掛けを仕組みと良かった。

【小学校】

- ・「ジャンケン列車」のときには、5年生が園児の背の高さに合わせて列車を作っていた。また、園児へのインタビューの時には、しゃがんでマイクを向けたり、「猛獣狩りゲーム」では、園児が一人にならないように手をつないだりして活動する姿があった。園児も楽しめるように遊び方を工夫している様子が見られた。
- ・幼小交流においては、これまで幼稚園の先生が小学生に向かって話をする機会は意外と少なかったのではないかと。今回、最後に幼稚園の先生が、交流活動の中で見られた5年生の良いところについて話をしてくれたので、小学生にとっても喜びややりがいにつながった。

< 考察 3 >

前年度の課題、活動内容だけでなく、園児児童の変容を幼保小で確かめ合う機会を作っていくことは事後研修の中で確かめ合うことができた。例えば、5年生の姿で、マイクを園児の目線に合わせてたり、分かりやすい言葉で話しかけたりする姿があった。これらの姿から、「つながる力」、「かかわる力」などが育っていることが分かる。また、「普段小さな子とかかわる機会のない子は慣れるまで時間がかかった」ことが指摘され、その手立てとして、「かかわりたいけどどうしたらいいか分からない子に対する手立てをもう一度グループで行うと良い。グループになると、もっと困っていることに気づけるチャンスになるのではないか」など今後の授業をすすめるにあたっての改善点が出た。さらに「園児がゲストではなく、ともに活動を進める一員となれる様、継続した交流ができると良い」という意見も示された。これらの話し合いから、次回の授業計画を変更していくという有効な交流となった。また、来年度ペアとなる学年の子と顔見知りになり、安心につながる交流となった。

課題としては、今回は、全体活動で進めたので、全体ではなく、小グループとして活動していくことが改善点として挙げられた。小グループであれば、より子ども達の姿を把握することができる。

5. カリキュラム・マネジメントの視点に立った考察

本研究では、Y市の幼保小連携プログラムに対してカリキュラム・マネジメントという視点から、実践を基に検討をした。改善点や課題を抽出し、カリキュラム・マネジメントに反映させる。

4で述べてきた3事例をあげ、課題・改善への示唆を含めて述べる。

5.1. 事例1について

事例1の課題は3点あった。1点目の課題は、「活動を年間計画に位置付けること」であった。この地域は芋ほりを毎年幼保小交流として行っていた。2012年度から全市的に年間計画に幼保小交流を位置づけて取り組むこととなった。それぞれの幼稚園・保育園・小学校の特徴を生かし、有効な取り組みがなされた。幼稚園と小学校と両方経験する子どもおり、継続的に経験することで学びをつなぐことができる。

2点目の課題としては、「指導者の立場においても交流する意味を明確にしていく必要があること」があげられた。改善点としては、今後の交流予定があるので、担当者が直接集まり、計画を共に立てていく、双方で計画を立てることは、子どもの情報交換ができるし、課題を明らかにして、即日常のカリキュラムに反映することができる。

3点目は、芋ほりの活動がメインで、子ども達の様子が事後研修で話題の中心にならなかった点から、「活動だけでなく、子どもの変容を確かめ合う機会を作っていくと良い」という課題である。

5.2. 事例2について

前年度からの課題1点目は、活動を年間計画に位置付けることであった。翌2012年度から全市的に年間計画に幼保小交流を位置づけて取り組むこととして改善されている。

課題の2点目の「指導者の立場においても交流する意味を明確にしていく必要があること」について、改善点として「直接集まって計画を共に立てていく」ことがあげられていた。事例2では、幼稚園・保育園は一緒に歌える歌を計画した。小学校は園児が楽しめるものを考えたり、作ったりして準備し、児童が主体的に進めていけるようにした。カリキュラムを幼保小で立て、共通化した。このように事前の打ち合わせがカリキュラムに生きてくるように改善することができた。

課題3点目「活動だけでなく、子どもの変容を確かめ合う機会を作っていくと良い」は、前年度から引き継がれていたが、活動が主体となり、改善していくことは難しかった。例えば、緊張や不安が感じられる子がいることを予想して、自分達が知っている歌を出し合って、計画に入れることで、緊張感がほぐれるように計画した。その結果、合同研修での振り返りで「最初は緊張していた園児たちも、小学校の体育館や教室に入ってから活動を続ける中で次第に学校の様子が分かり、学校への期待が高まった」と成果があげられたが、全員がそうであったのか、一人ひとりの子ども達の姿はどのように変容したのか、事後研修で幼保小の子ども達の姿から意見を出して、次回のカリキュラムに反映できると良い。

事例2では、事例1の課題3を改善するために「合同授業では、お互いの『ねらい』と『計画性』をもって取り組むと良い。相互にメリットが感じられるように意識し、今後は子どもの育ちに生かしていけるよう取り組みの時期を計画していくことが望ましい」という案が示された。

5.3. 事例3について

事例1であげられた課題の1点目、「活動を年間計画に位置付けること」は、2011年から幼保小連携活動に取り組んできて、全市的に年間計画として位置づけられ、定着してきたことは大きな成果である。5年生は、総合的な学習の時間「幼稚園児となかよし交流会」として、カリキュラムに盛り込み、学習として取り組んだ。

課題2点目「指導者の立場においても交流する意味を明確にしていく必要があること」については、幼小が隣接していることもあり、情報交換が可能であった。例えば幼稚園は交流で行うゲームについて、園児には事前に行う機会をもちルールに慣れさせたことで、不安材料がなくなり、楽しむことができた。

課題3点目、「活動だけでなく、子どもの変容を確かめ合う機会を作っていくと良い」は、事例2でもなかなか難しかった。事例2からは改善点として「合同授業では、お互いの『ねらい』と『計画性』をもって取り組むと良い。相互にメリットが感じられるように意識し、今後は子どもの育ちに生かしていけるよう取り組みの時期を計画していくことが望ましい」ことが示された。事例3では、「ねらい」と「計画性」をもって取り組んではいるが、やはり活動が中心であった。

さらに事例3から、「園児がゲストではなく、ともに活動を進める一員となれる様、継続した交流ができると良い」という課題が出た。今回は、全体活動で進めたので、普段小さな子と関わる機会のない子は慣れるまで時間がかかった。次回は全体ではなく小グループで活動していくことが小学校側の改善点として挙げられた。このことは、より子ども理解をする手立てとして有効だと思われる。幼稚園・保育園側も、小学生が招いて接待をしてもらうのではなく、主体的に参加できると良い。ではどのような時、子どもは主体的になるのか、幼児期の遊びがどのように学びにつながっていくのかを共に考え、共通理解することが重要である。

6. まとめと今後への課題

お互いに自校園のカリキュラム・マネジメントをそれぞれ行っているが、「接続」のための双方を合わせたカリキュラム・マネジメントが実践できていない。木下は、「接続期のカリキュラムを作成する場合、それぞれで作るのではなく、1つのもの、つまり「接続期カリキュラム」として、幼児教育を担う保育者と小学校の教師が一緒に作るのがのぞましい」と述べている[木下, 2019: p102] この実践が始まったのは2011年で、当時はまずは「交流」から始め、全市的に取り組みを広げていった。横井によると、「幼小連携において目指されるものが幼児教育から小学校教育への『滑らかな接続』・『円滑な接続』とされている以上、『交流』といった枠のみではなく、幼稚園・小学校のカリキュラムをつなぐこと、つまり、『接続』にまで視野を広げる必要がある。」[横井, 2007: p46]と述べている。また、木下は「連携と接続は車の両輪のようなものです。どちらが欠けても前に進むことはできません。」[木下, 2019: p29]と、連携と接続の両方が重要であると述べている。今後は、接続・連携のため、それぞれをつなぐカリキュラム・マネジメントが望まれる。カリキュラムを作り、実践して終わりではなく、カリキュラムの評価や改善が大切であることが改めて分かった。反省点・課題などが、改善点として次のカリキュラムに反映し、引き続きPDCAサイクルでカリキュラム・マネジメントを

行うことが重要である。

また、実践検討からカリキュラム・マネジメントを循環させていく際、筆者は、PDCAサイクルの循環に加えて「子ども理解」が最も重要だと考える。幼保小接続・連携においては、評価・改善すれば成果が上がるものではなく、「子ども理解」から始まり、計画→実践→振り返りによる「子ども理解」→改善が、幼保小共に進んでいくものだと考える。木下が「単に机上で教育課程を作るのではなく、実際に交流活動や情報交換などの連携を行い、そこで見えてきた子どもの育ちや学びを反映させた教育課程を作ることが重要です」[木下, 2019: p29] と述べていることから裏付けられる。

研究を通して、明らかになってきたのは保幼小の「子ども理解」である。それぞれの校種での「子ども理解」を学校・園で共有化し、幼稚園、保育園は今後も学びの基礎の充実を図り、小学校は、幼児期の教育で培った力を受けて、それを更に伸ばしていく。双方でカリキュラム・マネジメントの考え方で実践をした後、振り返り、成果、課題を出し、改善を図ることが必要である。

註

- (1) 輝くY市の子ども スタートカリキュラムY市版 幼児期終了前を「アプローチカリキュラム」、小学校入学から1学年1学期終了を「スタートカリキュラム」、合わせて「接続カリキュラム」として位置づけているが、表題が「スタートカリキュラムY市版」と出版されている。「しっかり学ぶ しながわっこ」を参考にして作成した。
- (2) 学びの一体化幼保小連携部会とは、Y市教育委員会Y市学校教育ビジョン 第3章子どもを支える学校づくり 基本目標4 学校教育力の向上に向けて、中学校区で取り組んでいる部会である。

引用文献

- 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について (答申)』 p 23
- 第3次 Y市学校教育ビジョン (2017) 第3章子どもを支える学校づくり 基本目標4 学校教育力の向上
幼保中の連携を生かした教育「学びの一体化」の充実 p41
<https://www.city.yokkaichi.lg.jp/www/contents/1001000002438/simple/11dai3shokihon4.pdf> 最終閲覧日 2020/1/10
- 木下光二 (2019) 遊びと学びをつなぐ保幼小接続カリキュラム チャイルド本社 p92
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針 平成29年告示版 フレーベル館
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 平成29年告示版 東洋館出版社
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説 平成29年告示版 東洋館出版社 p39
- 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領 平成29年告示版 フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (2017) 2019年告示版 フレーベル館
- 田村知子 (2011) カリキュラムマネジメントのエッセンス (編) 実践・カリキュラムマネジメント ぎょうせい pp2-11

横井紘子（2007） お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要（4） pp45 - 52
Y市教育委員会（2011） 輝くY市の子ども スタートカリキュラムY市版 pp2 - 6

Curriculum Management that Enhances Connection and Cooperation with Kindergartens, Nurseries, and Elementary School

Yuko Tanaka

Summary

The purpose of this paper is to examine the practice of curriculum management in order to enhance kindergarten, nursery school and elementary school connections and cooperation in the future by verifying the practice of elementary school connections and cooperation in Y city. The “connection curriculum” launched in 2011 by Y City, which was regarded as an advanced approach at the time, positioned the “approach curriculum” before the end of childhood as the “start curriculum” from elementary school entrance to the end of the first semester of the first grade. A small exchange between young children has been made. First, we analyze and consider the “connection period curriculum” created and implemented by City Y. Secondly, we looked back on the educational activities and joint training conducted in the junior high school district, extracted effects, improvements and issues, and explored the issues of curriculum management. As a result, it was clarified that the child care elementary exchange practiced with the prospect of entering elementary school, but there was a problem in mutual understanding on how to reflect the practice results in the curriculum.

Key word Connection and collaboration between preschool education and elementary school education Curriculum Management Preschool education and elementary school education connection program Approach Curriculum Start Curriculum